

二〇〇四年度国文学会彙報

二〇〇四年度国文学会活動状況

〈新入生歓迎会〉

二〇〇四年四月七日 於紫苑館食堂 学生部会共催

△国文学会総会・研究発表会△

二〇〇四年六月二〇日 於寧靜館会議室

春季総会・研究発表会 次第

・総会

・研究発表会

御伽草子「御曹子島渡」と江の島弁財天

本学大学院博士前期課程 吉田桂子

「たけくらべ」受容研究——樋口一葉の大正期——

本学大学院博士後期課程 笹尾佳代

幸田露伴「風流仏」論

△記念事業・講演会△

本学専任講師 西川貴子

同志社大学国文学専攻創立五十周年国文学会設立四十周年記念
事業

二〇〇四年一月七日 於寒梅館

第一部 卒業生の集い「同志社の思い出」

坂本信幸

佐伯真一

生井武世

司会 吉野政治

於クロイバーホール

第二部 演能「羽衣」

金剛流二十六世宗家 金剛永謹

於ハーディーホール

(同志社大学ホームカミングデー二〇〇四共催)

懇親会

於京都ブライトンホテル

加美宏先生最終講義・講演会

二〇〇五年一月一七日 於至誠館4番教室

「軍記物語の本質」

(文化学会と共催)

△刊行事業△

「同志社国文学」

・第六一号(同志社大学国文学専攻創立五十周年国文学会設立

四十周年記念論文集)

二〇〇四年一月一二日発行

・第六二号(加美宏教授退職記念号)

二〇〇五年三月二〇日発行

「国文学会会報」

二〇〇五年三月二〇日発行

二〇〇四年度修士論文題目

万葉集における連対の用法

——人麻呂から赤人へ——

山本直子

『今昔物語集』卷二〇の構想と思想

佐尾希

御伽草子『御曹子鳥渡』の独自性

——笛と義経像の問題から——

吉田桂子

狂言『附子』から見る大藏流狂言台本の変遷について

——擬態語、擬声語を中心に——

HYBL ONDREJ

実悪の部の評文の展開

——宝永・正徳・享保期を中心に——

戸川郁子

森鷗外「舞姫」試論

——パウエル・ハイゼの理論から——

濱田真由美

衣巻省三と同時代における文学受容

機能動詞表現の可能性

海野崇

夫婦間の呼称語と他称語

——江戸後期の鶴屋南北の作品を中心に——

石田裕子

二〇〇四年度卒業論文題目

『古事記』の大国主神について

河崎倫子

万葉集の中の「霞」と「霧」

——その共通点や相違点——

『源氏物語』における日記

——須磨・明石の絵日記を契機に——

深澤花菜

和泉式部の「現世」観

平安物語における雪の役割

——源氏物語を中心に——

阪口真衣

色彩考

——『紫式部集』二五番歌から四三番歌に

おける一考察——

高崎扶美子

『源氏物語』玉鬘君

——再構成される秋好中宮——

土生田乃梨子

『源氏物語』夕顔卷

——夕顔の女の性格について——

林優輝

『竹取物語』における「光」

平安百鬼夜行説話の本質

『建礼門院右京大夫集』における資盛への愛

——七夕歌をめぐって——

松田文月

『落窪物語』の主題

——『住吉物語』との比較を通して——

浅野利佳

石原照大

石代里沙

岡本華奈江

『枕草子』の故事と中関白家の没落

——第五段「大進生昌が家に」を中心に——

河合 康次

『源氏物語』における「ゆかり」の意義

——物語の方法としての「ゆかり」——

櫛井 亜依

『今昔物語集』の志向

——巻題三十第八話を中心に——

古賀 美 牙

『今昔物語集』における「亀」の意味

——動物報恩譚の視点から見て——

高橋 尚美

『宇治拾遺物語』における罪観念

——「罪」に対して負う結果の意味——

千葉 有希子

『今昔物語集』における不幸な子どもたち

——巻9第1話と巻19第27話を中心に——

土井 梢

謡曲「江口」の歌舞性能性についての考察

昔話「桃太郎」の語り口

『鉢かづき』

——観音靈験にみられる母と子の愛——

中井 裕美

御伽草子『文正さうし』の特質

——民間伝承との比較を通して——

萩原 由起子

『落窪物語』における婚姻形態

『今昔物語集』の「源大夫」考

福島 明香

藤井 志帆

浦島物語の本質

——『御伽草子』を中心に——

村瀬 愛奈

『今昔物語集』陰陽道説話の主眼

——第一九第二四「代師入太山府君祭都状僧語」を中心に——

森本 枝里子

中世の人々が抱いた義経像と天狗伝説

——鞍馬天狗伝説の意義と発生——

東 留以

謡曲「三井寺」における「鐘」の位置

謡曲「鉄輪」における清明の活躍

祇園祭における橋の役割

——「浄妙山」と「橋弁慶山」——

近藤 麻衣子

源義家の人物像

——古代・中世の文学作品に注目して——

須藤 麻里絵

『とはすがたり』における「条」と「雪の曙」

謡曲「善知鳥」の形成

——その基盤と土壌を探る——

竹内 育子

能「経正」における修羅の苦患とは

近世の鬼の造形の魅力

——草双紙・子ども絵本を中心に——

富永 千穂

三上 貴子

光岡 紫野

秋岡 香衣

嫁入絵本『ばけものよめ入り』について

小河 菜々

——嫁入物作品どうしの影響関係を考える——

戦後昭和文楽の動向を明らかにする

新谷 かな

——演目の固定化に注目して——

『東海道四谷怪談』の舞台と仕掛け

末吉 多紀子

『芦屋道満大内鑑』における狐の子別れの意義とその考察

山本 瞳

大田垣蓮月の歌をめぐる

——評価の変遷と歌風についての考察——

山本 廣子

附 蓮月歌集

『女達三日月於遷』に見られる浮世草子と合巻の関連性

浅尾 拓朗

実録研究

——慶安太平記物——

江戸戯作者たちの対読者意識

梅原 健

——彼らの宣伝意識を通じて——

近松門左衛門の異国認識

川原 悠子

——『国性爺合戦』を中心に——

轆轤首研究

——近世文芸における怪異表現——

神明 あさ子

近松の影絵

——『大経師昔暦』『鐘の権三重帷子』の演

出——

絵双六と吉原

鈴木 瑞佳

江戸の猫

田栗 栄子

美意識と「他者の眼差し」

福田 佳美

太宰治「猿ヶ島」論

——猿に込められた思い——

赤松 由美

向田邦子『思い出トランプ』

——小説における向田邦子の家族像と人間

像そして彼女が描きたかったもの——

伊藤 紘介

「痴人の愛」論

井本 めぐみ

泉鏡花「化鳥」——語り・姉さんと母・表題について——

宇都宮 菜々

海を越えた『ノルウェイの森』

大北 ハナ

——その普遍性の理由——

大野 智香

室生犀星「杏っ子」論

——犀星の執筆意図と読者による受容の関
係性—— 岡本 かおり

作家・北杜夫の変遷

——「神々の消えた土地」からの考察——
生と死 小山大介

——宮本輝「幻の光」「錦繡」論——

山田詠美「ベッドタイムアイズ」論 加藤 方彦

——その恋愛の根底にあるもの——

与謝野晶子「明るみへ」 金子 修己

——晶子が望んだ女性の覚醒——

宮本輝「螢川」に見る生と光 木内 若葉

谷崎潤一郎「痴人の愛」

——「お伽噺の家」への回帰—— 駒 栄羽

童謡詩人金子みすゞ「いろいろな詩と仏様と

みすゞの心」について 小森 彩

芥川龍之介「葱」論

——「現代物」への挑戦—— 齋 藤 香

太宰治「お伽草紙」の背景

坂本 聖子

『陰獣』論

——作中人物に投影された乱歩と結末疑惑
部分の関係性について—— 志知 多恵子

江戸川乱歩 少年探偵団シリーズのもつ魅力

『日本橋』 須賀 由花

——舞台を装った小説——

皆川博子「乱世玉響」における二人の少女 杉山 吉忠

堀辰雄「聖家族」論 高橋 志郎

村山槐多論 田口 貢大

——文学性と芸術性の共存・関連について——

変質する純文学とエンターテインメント文学 田口 泰子

——舞城王太郎を通じて——

中島敦「李陵」論 田島 裕子

——運命の受容と擬似体験——

「蜘蛛の糸」に込めた芥川龍之介の思い 田中 亜以子

——作品への実生活の投影——

川端康成「川のある下町の話」論 茶野 真由美

『活動寫眞の女』作中に描かれる京都と浅田次郎の作品世界 中田 好美

武者小路実篤『お目出たき人』が『お目出たき人』であった理由

中畑 順子

——『通俗三国志』とのストーリー比較——
近代を生きる鏡花

植田 洋平

『くっすん大黒』における町田康の思想としてのパンク

藤田 修

——『売色鴨南蛮』に見る鏡花の転換期——
堀辰雄『ルウベンスの偽画』

兼子 皓世

太宰治『新釈諸国噺』論

藤原 卓

——言葉で描かれたルウベンス——
言葉と音楽

木村 弓子

——創作に見る太宰治の思い——

村岡 真千子

——小林秀雄『モオツアルト』にみるその

鈴木 淳子

——『新しさ』と『京極らしさ』——

森内 夕佳

村上海樹の作品における図書館

高木 睦子

よしもとばなな『キッチン』

森本 瞳

車中の女と車外の男と読者

田中 美穂

『F・O・U』にみる佐藤春夫の芸術観

山脇 睦子

——菊池寛『真珠夫人』の戦略——
太宰治『皮膚と心』

長 佑 紀子

芥川龍之介の戯曲『二人小町』

吉田 聡子

——身上相談との比較にみる作品の意義——
宇野浩二『蔵の中』

出口 貴美子

——笑いと泣きの感情表情から——

安達 直子

——社会と接点を通して見えてくるもの——
月光・狂気・ディオニユス

中川 奈津子

司馬遼太郎『竜馬がゆく』の英雄の条件

池本 広中

——中島敦『山月記』とファウスト・ツァ
ラトゥストラ・「わが西遊記」——

中村 紘子

三島由紀夫『豊饒の海』

岩下 周子

——認識の罪と解脱について——
吉川英治『三国志』

中村 紘子

有袋類人間の地獄巡り

——『カンガルー・ノート』の安楽死と哲
学——
成田 真理

福永武彦『忘却の河』における家族の再生
泉鏡花の小説とニーチェ哲学
船田 奈保子

——恋愛物語の比較から——
意識と身体の「変質」
堀口 こみち

——日本の産児調節と「非色」——
『女生徒』のまなざし
水山 知春

『破戒』における犠牲者の心理
——封建社会から資本主義社会への移行と
米崎 寿行

劣等感——
遠藤周作『深い河』論
米山 浩

——遠藤周作が見た日本の戦後社会——
作品構造に関する考察
和知 宏樹

——SF作品『復活の日』をもとに——
『ベトナム戦記』開高健の描写する「死」
菅野 陽平

明治期の新聞におけるルビ変化
略語に関する一考察
西村 万里

——新聞の見出しに見られる略語から——
植原 誠

『打聞集』の文章の一特徴について

——対応説話の比較を通して——
京ことばの優美性／御所ことばと女性語の関連から
采野 未和

文章の主題と文の機能
漢語副詞「多分」の語史
沖原 千菜美

「吾輩は猫である」における文の長さについて
植物の命名の仕方を考える
熊林 陽子

児童文学の比喩表現
マンガに見る女ことばの性質
小島 繁人

——文末表現を中心に——
「私は犬が怖い」型の文の歴史の変遷と文体的特徴
佐々木 美樹

「火垂るの墓」における会話引用形式の特徴
「見る」の本質と意味範囲の分類検証
菅原 なつみ

——中古作品『落窪物語』から——
受け手が女性である場合に見られる、女性の書きことばの特徴
清家 正嗣

——中古作品『落窪物語』から——
受け手が女性である場合に見られる、女性の書きことばの特徴
関根 慶之

——中古作品『落窪物語』から——
受け手が女性である場合に見られる、女性の書きことばの特徴
瀧本 幾代

——中古作品『落窪物語』から——
受け手が女性である場合に見られる、女性の書きことばの特徴
田辺 豊隆

刑法の構文的特徴について

——ニュース記事と比較して——

原田 菜摘

「おはようございます」の使用意識について

福岡 悟

新島襄の書簡の研究

——頭語・結語の変遷——

松本 真梨子

小説における「など」と「なんか」の意味・用法

三木 久美子

万葉集における色彩表現

——恋の歌で用いられる色の傾向——

盛植 早和子

歌謡曲における当て字について

山本 可奈